

# 刀池 1 ～ 3 号窯跡の再検討 － 遺構編 －

公益財団法人  
瀬戸市文化振興財団  
青木 修

## 1. はじめに

本稿は、昭和 41 年 7 月、大川清を代表とする国士舘大学考古学教室により発掘調査が実施された刀池 1 ～ 3 号窯跡（愛知県登録名：刀池 B 古窯群）に関する調査記録をもとに、検出遺構の再検討を試みるものである。1・2 号窯窯体図は、1974 年刊行の『常滑窯業誌』に掲載されているが、ここでは未報告である 3 号窯窯体図と遺構配置図、そして 1・2 号窯窯体図については原図をもとに報告する。これらの記録類は、調査後、国士舘大学から大川清が所長を務めた日本窯業史研究所で保管されてきたが、現在は出土遺物とともに知多市歴史民俗博物館へ移管されている。

窯跡は、昭和 39 年 8 月、杉崎 章、猪飼英一が農道の拡張工事により露出した燃焼室と思われる窯体の一部を発見したことに始まる。その後、盗掘を防ぐことを目的として、昭和 40 年 1 月 4 日・5 日の 2 日間、知多町教育委員会（現・知多市教育委員会）により露出していた燃焼室の調査を行った。調査結果は、『知多町南部の古窯址』で報告され、燃焼室と分炎柱、2 本の窯内支柱などが検出され、特殊な遺構として注目された。なお、国士舘大学の調査は、このとき検出した燃焼室を含め、灰原を除く窯跡全域を対象とした。

## 2. 窯跡の位置と周辺環境

本窯跡の周辺は、標高 40～50m で推移する丘陵が広く展開し、複雑に派生した小支丘が形成されている。支丘の間には様々な方向へ開口する谷が形成され、その最も入り込んだところには、大小の農業用溜池が造成されている。本窯跡の名称にあてられた「刀池」もそのひとつで、本窯跡から北へ 100m の地点にある。窯跡は、大興寺と草木の集落を結ぶ主要道路（県道草木・大野線、現在は金沢・草木線）の途中に、金付旧池があり、そこから北へ延びる農道を 100m ほど進んだ地点、標高 40m 前後の東向き斜面にある。調査当時の地籍は、知多市大興寺字森越である。

本窯跡の周辺、特に大興寺地区を歴史的に概観すれば、12 世紀後半と 13 世紀中葉の窯跡が分布する地域である。昭和 40 年に調査された旭大池 A 古窯群は、本窯跡から北西へ 1.2km の地点に立地し、12 世紀中葉の壺・甕焼成窯が確認されている。平成 5 年に調査された刀池 A・E 古窯群は、本窯跡から北へ 400m の地点に立地し、合計 5 基の窯体が検出され、12 世紀中葉の山茶碗焼成窯と 13 世紀中葉の壺・甕焼成窯が確認されている。また、平成 8～10 年にかけて調査された籠池古窯群、西湊馬 A～C、E・F 古窯群では、12 世紀中葉から後半にかけての山茶碗焼成窯が確認されている。

さて、大興寺集落の北に大興寺があり、この寺に伝わる 4 体の懸仏の裏面には、「大福寺、永仁四年」などの銘が判読され、鎌倉時代には「大福寺」として存在していた可能性が高い。また、室町時代のはじめには、一色範氏により大興寺として再建された記録も残る。

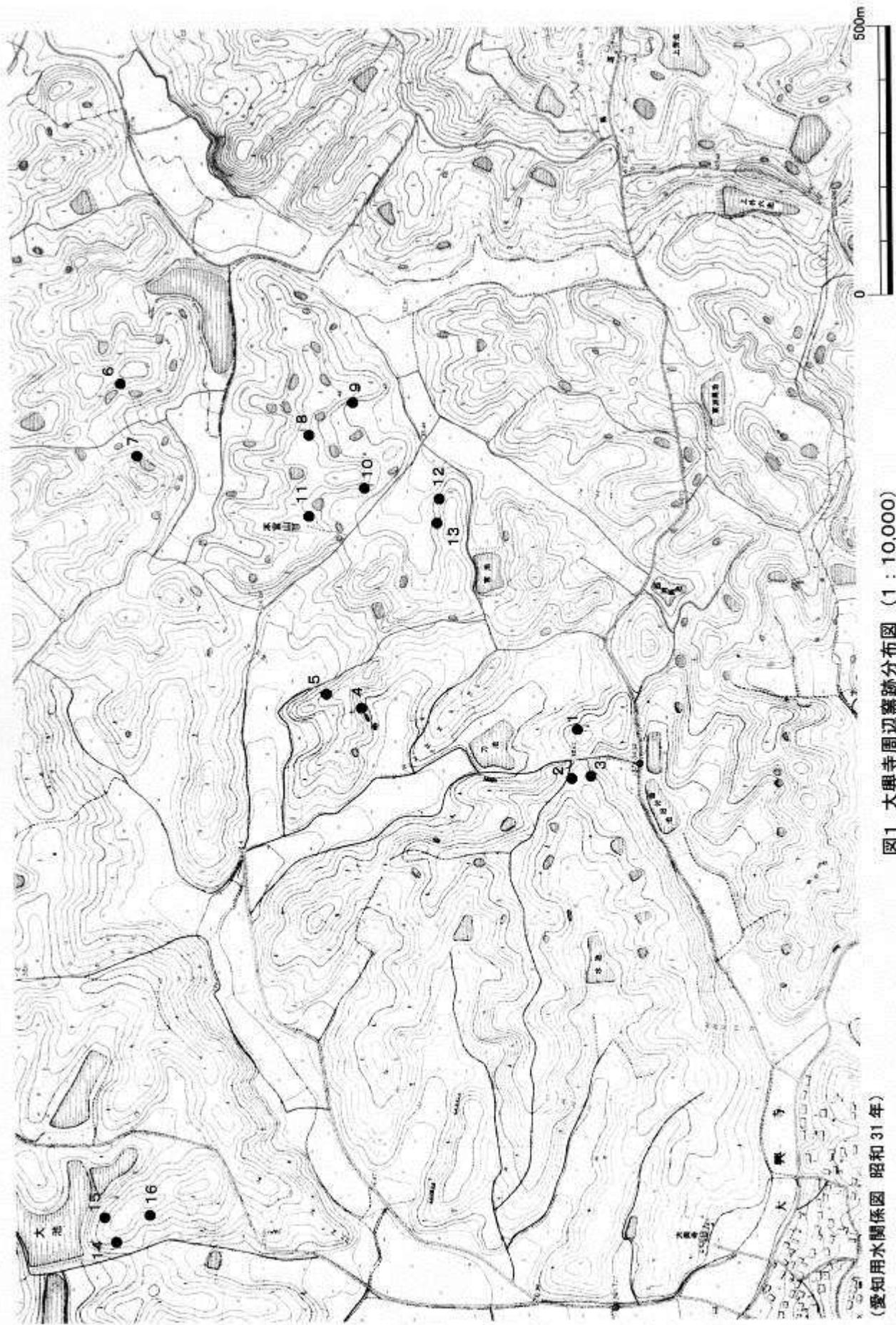


図1 大興寺周辺窯跡分布図 (1 : 10,000)

表1 大興寺周辺窯跡一覧

No.	窯跡名	窯体	所在地	主な遺物	遺跡番号	調査年
1	刀池B古窯群	1~4号窯	大興寺字大僧	広口壺・甕・片口鉢Ⅱ	450052	昭和40・41年
2	刀池C古窯群	5~7号窯	大興寺字大僧	広口壺・甕・片口鉢Ⅱ	450053	
3	刀池D古窯群	8~10号窯	大興寺字大僧	広口壺・甕・片口鉢Ⅱ	450054	平成4年
4	刀池E古窯群	13~15号窯	大興寺字刀池	広口壺・甕・片口鉢Ⅱ	450057	平成5年
5	刀池A古窯群	11・12号窯	大興寺字刀池	山茶碗・小皿	450051	昭和60年、平成5年
6	籠池古窯群	1号窯	岡田字籠池、上り戸	山茶碗・小皿	450063	平成8年
7		2号窯				
8	西瀨馬A古窯群	1・2号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450060	平成8年
9	西瀨馬B古窯群	3号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450061	平成8年
10	西瀨馬C古窯群	4号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450062	平成9年
11	西瀨馬D古窯群	5号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450064	
12	西瀨馬E古窯群	6~8号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450065	平成10年
13	西瀨馬F古窯群	9・10号窯	大興寺字西瀨馬	山茶碗・小皿	450088	平成10年
14	旭大池A古窯群	1・2号窯	大興寺字長根	広口壺・甕	450049	昭和40年
15	旭大池B古窯群	1基	大興寺字長根	甕?	450050	
16	旭大池C古窯群	1基	大興寺字長根	甕?	450082	

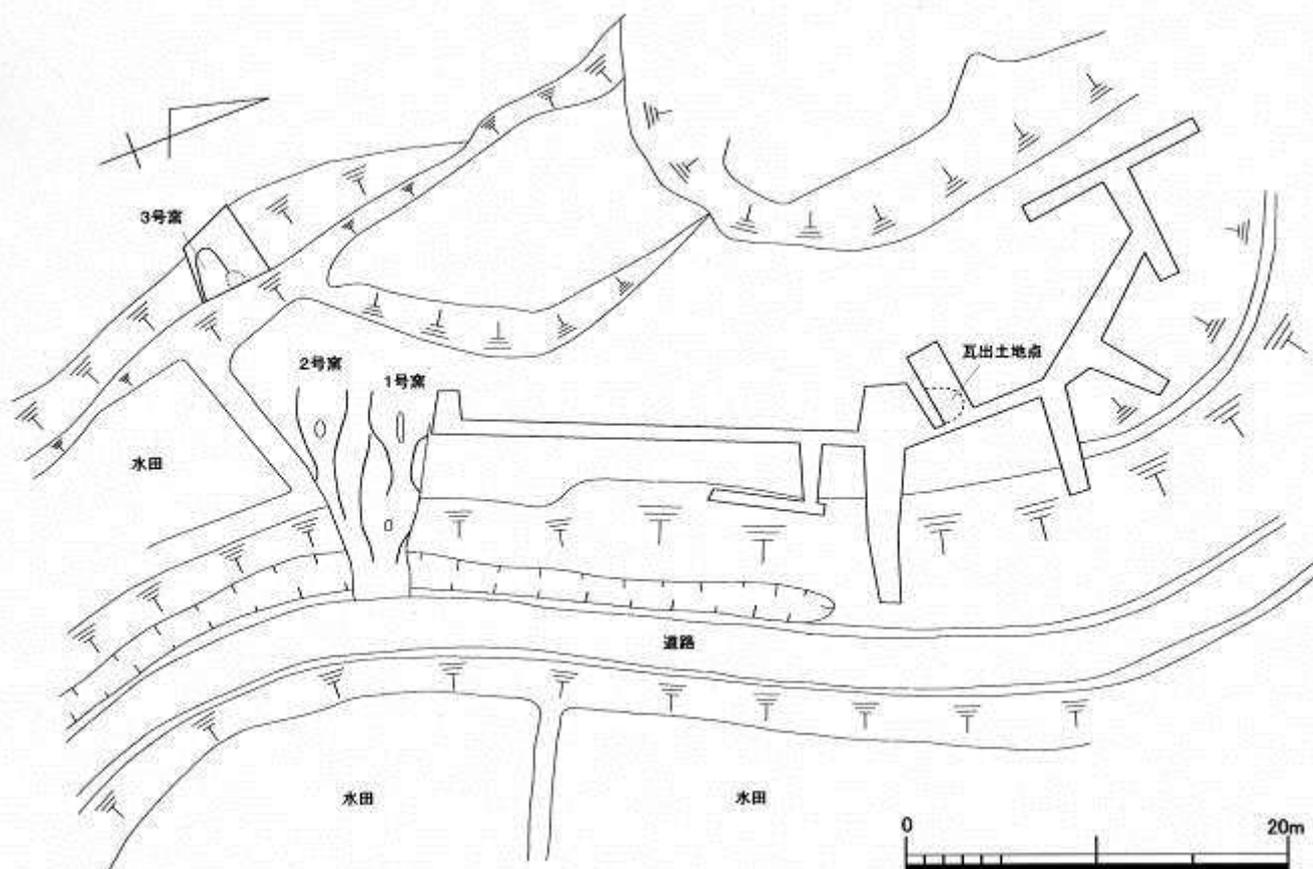


図2 刀池1~3号窯跡遺構配置図

### 3. 遺構

ここでは、各遺構について紹介するが、1・2号窯窯体図については、原図の内容を優先した。なお、図中に付した方位は、磁北で示してある。

まず、遺構配置図をもとに各遺構の位置関係について解説する。調査は、丘陵の東向き斜面を対象として、南寄りの地区に窯体の検出された調査区があり、そこから北へ向け、窯体の有無を確認するためと思われるトレンチが複雑に接続しながら約45mにわたって続いている。調査区の東側には、大きく蛇行して南北方向へ延びる道路が敷設され、その東側には水田があり、この付近に灰原が広がっているものと想定される。

1号窯は、道路側に焚口が開口し、燃烧室から焼成室まで残存する。2号窯は、1号窯の南側にほぼ並列し、焚口は1号窯より標高の高い位置にあり、燃烧室から焼成室前半部が残存する。3号窯は、2号窯の焚口付近から西へ約11mの位置にあり、3基の窯体のなかで最も標高の高い位置にあるが、残存状況は悪い。

#### (1) 1号窯

1号窯は、窯体の大規模な改造が行われており、1次窯、2次窯として記述する。

1次窯は、道路側にあり、主軸をN-67°-Wにとる。2次窯の構築により焼成室後半部の状況は不明であるが、燃烧室、分炎柱、焼成室前半部付近が残存し、分炎柱の後方から主軸線上に支柱あるいはその痕跡が4本認められる。残存長11.2m、最大幅3.0mである。燃烧室は、長さ2.4m、焚口幅1.02m、最大幅1.46mである。床面傾斜は、16.5°を測り、焚口から分炎柱までほぼ一定の傾斜で上昇する。分炎柱は、縦軸1.16m、横軸70cm、高さ74cmまで残存する。通炎孔の幅は、左側64cmに対し右側74cmで、右側が広く構築されている。焼成室は、残存長8.8m、最大幅は分炎柱から1.4m付近にある。床面傾斜は、分炎柱から1m付近までは6°、そこから末端までは18°で上昇する。

支柱は、直径12cmの芯に粘土を巻き付けて構築している。分炎柱の中心から支柱1までの長さは1.02m、支柱1から支柱2までが1.26m、支柱2から支柱3までが1.6m、支柱3から支柱4までが1.5mの間隔でそれぞれ構築されている。支柱1は、不整形を呈し、縦軸44cm、横軸62cm、高さ36cmまで残存する。支柱2は、縦軸67cm、横軸60cm、高さ32cmまで残存する。支柱3は、2次窯燃烧室構築の際に削平されたと考えられ、芯部のみ残存し、規模は不明である。また、支柱5は、左側壁際に固定され、直径28cmの円柱形である。支柱6は、支柱5から2.3m付近、左側壁際に根元から折れた状態で検出されている。規模は、直径28cm、長さは40cmである。

2次窯は、1次窯焼成室中央付近にある支柱4を改修し、分炎柱として再利用している。主軸は、N-76°-Wにあり、1次窯より9°西へ傾いている。残存長5.36m、最大幅3.4mである。燃烧室は、長さ2.2m、焚口幅1.14m、最大幅1.84mである。床面傾斜は、18°で上昇する。分炎柱は、支柱4を利用し、粘土を貼り付けることにより構築している。縦軸1.52m、横軸58cm、高さ80cmまで残存する。通炎孔は、左側80cm、右側62cmで左側の方が広く構築されている。焼成室は、残存長3.16m、最大幅は分炎柱の中心から1.0m付近にある。床面傾斜は、16°で上昇する。なお、2次窯における焼成室前半部付近までの床面では支柱の痕跡は確認できない。前庭部は、1次窯の焼成室前半部から燃烧室に土砂を盛ることにより平坦面を造成して構築している。焚口の后方、1次窯焼成室床面に図示してある遺物は、2次窯に伴う可能性が高い。

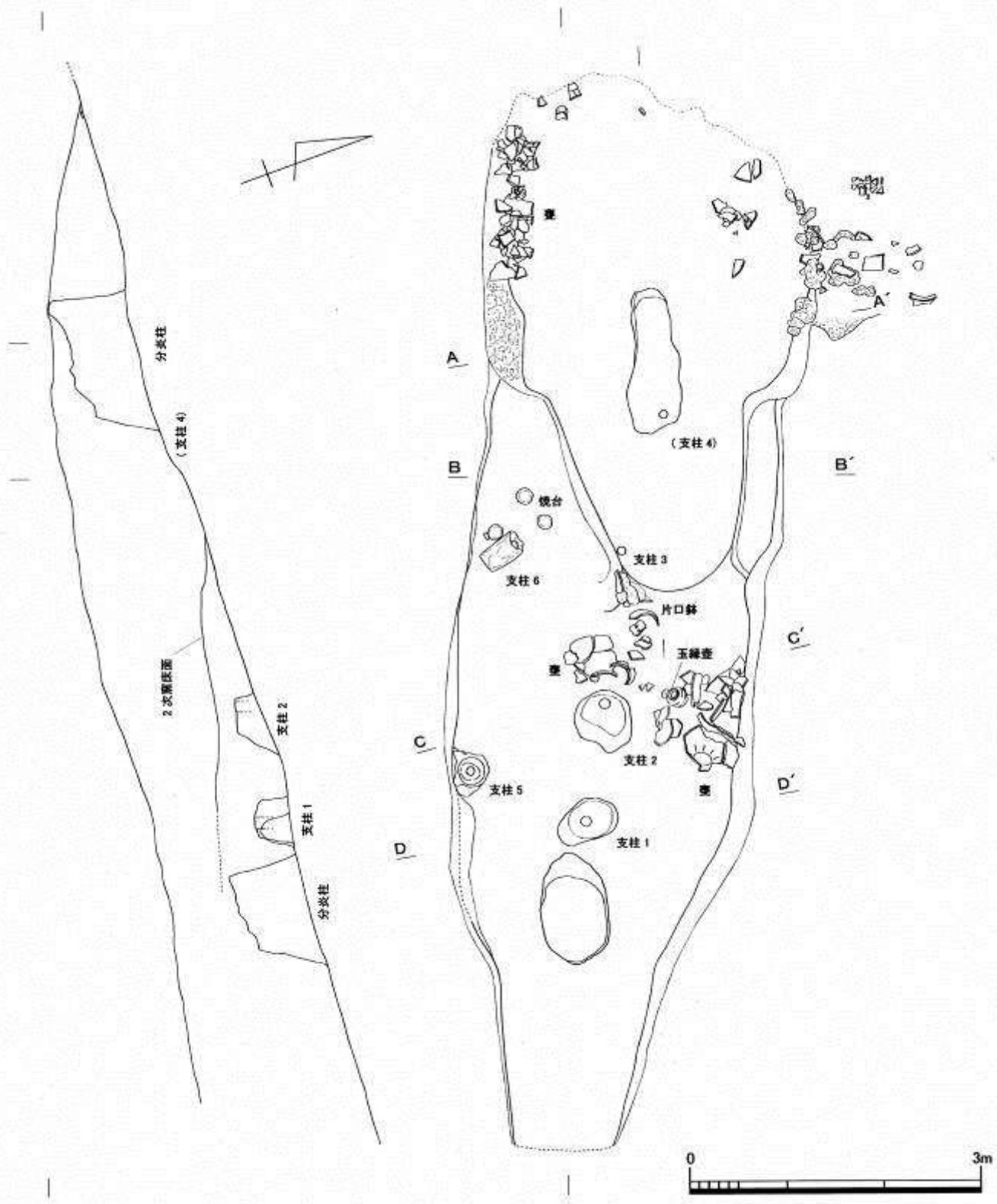


图3 1号窯窯体实测图1

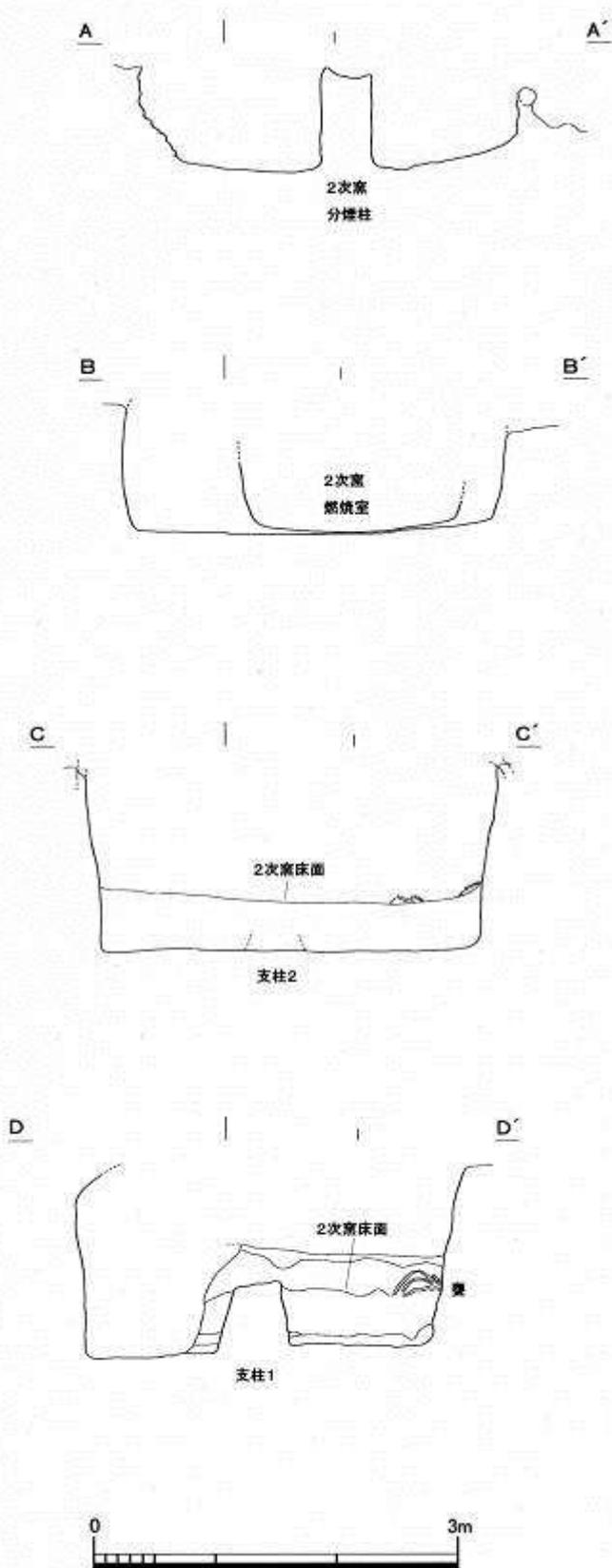


図4 1号窯窯体実測図2

(2) 2号窯

2号窯の主軸は、N-69°-Wにあり、1号窯（1次窯）の主軸とほぼ並行する。窯体は焼成室後半部を流失しているが、燃烧室・分炎柱、焼成室の前半部は比較的良く残存している。残存長 4.8m、最大幅 2.5mである。燃烧室は、全長 1.5m、焚口幅 1.3m、最大幅 1.5mである。床面傾斜は 14° で上昇する。分炎柱は、長軸 1.0m、横軸 60cm、高さは床面から 56cm まで残存する。通炎孔の幅は、右側 70cm、左側 60cm である。焼成室は、残存長 3.3m、最大幅は分炎柱に接する部分から 1.9m付近にある。床面傾斜は、13° で上昇する。両側壁は開き気味に立ち上がり、高さ 30cm まで残存する。焼成室床面には、5個体の甕が横一列に窯詰め状態で検出されている。甕の底部付近には焼台があり、それぞれの甕は比較的近接した状態で置かれている。

燃烧室床下面からは、土坑が検出されている。土坑は半円形を呈し、長さ 1.3m を測り、中から甕の破片が出土している。

(3) 3号窯

窯体の主軸は、N-95°-Wにあり、ほぼ西側へ向けている。窯体は、大半が流失しており、検出面の位置を正確には特定できないが、床面傾斜などから焼成室の後半部付近と思われる。残存部分は、床面と側壁の一部で、残存長 2.0m、最大幅 1.5m、床面傾斜は 20° で上昇する。側壁は最大で約 40cm の高さまで残存する。床面直上からは、甕の破片と焼土塊が出土している。

(4) 瓦溜

瓦溜は、図2で瓦出土地点として示し、1号窯から北へ約 28mの地点にある。周辺には遺構の存在を示す記述は無く、瓦以外の出土遺物についても不明である。出土した瓦は、平瓦で凸面には反転した「大福寺」銘が認められることから、瓦の成形具（叩き具）に刻まれた文字が写されたと考えられる。

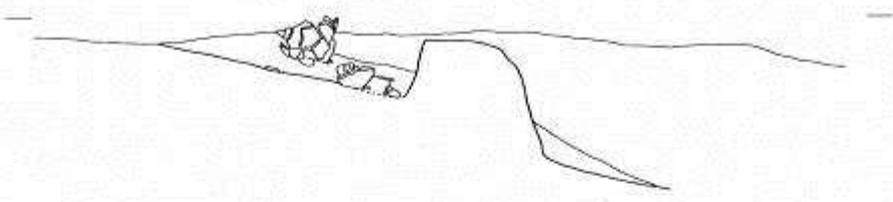
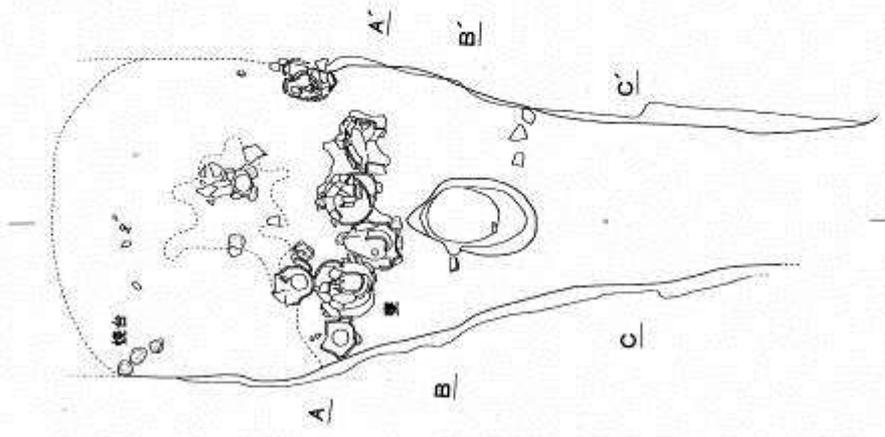
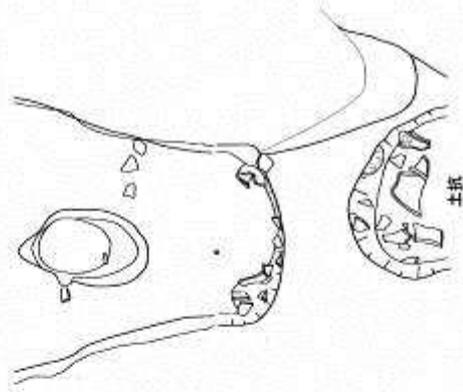
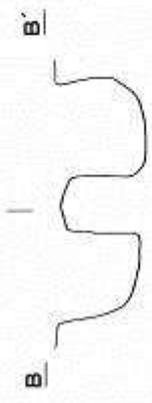


图5 2号窯体实测图

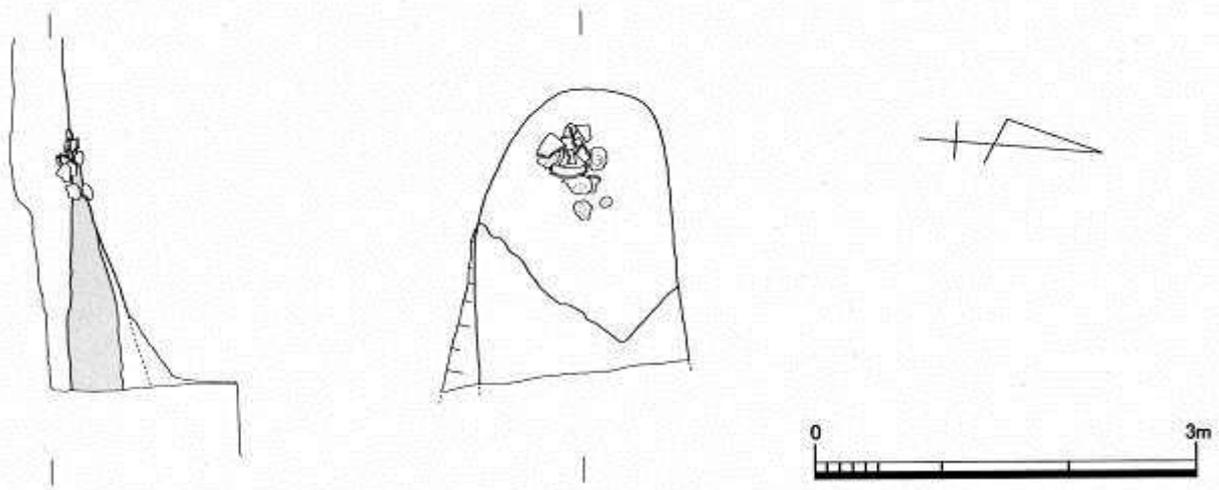


図6 3号窯窯体実測図

#### 4. 小結

ここでは、紹介した遺構について、その問題点についてまとめるが、やはり1号窯にみる窯体構造が特筆される。1号窯（1次窯）は、分炎柱の主軸線上に構築される支柱の存在である。上芳池2・3号窯跡や七曲B1号窯跡など、知多市北東部から南東部、阿久比町北西部付近の窯跡で認められる事例であり、地域的な特徴と捉えることもできる。また、左側壁際から検出された支柱5・6については、焼成に係る影響を検討する必要がある。

1号窯（2次窯）は、1次窯の支柱を分炎柱として利用して窯体を構築しており、大掛かりな築窯作業が必要であったと判断できる。特に、燃烧室の壁面は改めて構築する必要があり、1次窯焼成室の天井をどのように再利用したか興味深い。いずれにしても、窖窯構造の窯体を本事例のように再利用して構築する意義を考える必要がある。

本窯跡の帰属時期は、『愛知県史 窯業3 常滑系』で示したとおり、壺・甕類の形態的特徴から常滑窯編年6a～6b型式期（13世紀後半）を大きく変更させることは無いが、本窯出土品として注目される瓦類は、窯体から離れた地点から出土しており、本窯の焼成品と断定できる積極的な根拠が希薄である。つまり、瓦類を含めた遺物の再整理を行った後に、改めて本窯跡に関する評価を提示したいと考えている。

最後に本稿の執筆に際し、石川秀男氏ならびに真田泰光氏には遺構図の提供と掲載の機会を頂き、心から感謝の意を表する次第である。

#### 【参考文献】

- 『知多町南部の古窯址』知多町文化財資料9 1968 愛知県知多郡知多町教育委員会
- 『大知山古窯址—知多半島古窯址群の展望—』 1970 東海古文化研究会
- 『常滑窯業誌 常滑市誌別巻』 1974 常滑市誌編さん委員会・常滑市役所
- 『刀池11号窯 知多市文化財資料23』 1986 知多市教育委員会
- 『刀池遺跡 知多市文化財資料32』 1993 知多市教育委員会
- 『刀池古窯跡群 愛知県埋蔵文化財センター調査報告第64集』 1995  
財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 『愛知県史 別編 窯業3 中・近世 常滑系』 2012 愛知県史編さん委員会